

障害児教育における学級指導と言語指導

浜 本 宏 子

○ はじめに

一九七三年四月一〇日入学式。^(注) 中学部の新一年生は、木嶋 誠二(18才) 両上下肢・言語ともに重度の脳性マヒ。車いす使用。未就学で、前年四月、入園と同時に小学部六年生に編入された。知能はかなり高いと思われるが、意志の伝達には困難である。

田 勉 智祥(18才) 両上下肢重度の脳性マヒ。車いす使用。木嶋さんと同時に編入。

河野 英彦(12才) 右足弛緩性マヒ。八月に大阪の中学校へ転出。

高橋 敏子(14才) 脳性マヒによる右上下肢マヒ。小学校一年生の八月に転入。

佐方喜久美(12才) 両股関節脱臼後遺症。十月に地元中学校へ転出。

清水 美紀(12才) 脊髄損傷による下半身マヒ。車いす使用。小学校四年生の三月に養護学校から転入。

林 和美(12才) 言語重度の脳性マヒ。伝い歩き。小学校六年生の一月に養護学校から転入。

森 秀子(12才) 脳性マヒ。松葉杖使用。小学校五年生の四月に養護学校から転入。

の八名であった。

ひとりではみんなのために みんなはひとりのために

学級担任としてこの子たちと学級づくりをするにあたって、学級経営の基本方針を「ひとりではみんなのために、みんなはひとりのために」とし、つぎのような目標を考えた。

(一) 自主・自立の精神

障害を持たされた子どもたちには、周囲の人々に迷惑をかけまいと、自分の欲求をおさえようとする意識的・無意識的傾向が非常に強い。それは、一見、無気力な態度となつて現われる。「『障害を持っていてから〇〇しない、できない。』という考え方からは、自分を成長させる何ものも生まれては来ない。『障害を持っていてか

ら〇〇しよう、できるように努力・工夫してみよう。』という所からこそ、成長の可能性が生じて来る。」という視点で、欲求を欲求として意識し、自主・自律の精神をもって行動する子ども・学級を作り上げたいと思った。

□ 友情

「Aさんには〇〇はできないから、代わりにしてあげよう。」というところが、思いやりであり友情であると言われている。しかし、相手に働きかけることをせず、涙ぐむことで自己満足する安易な同情は、お互いを墮落させるだけである。真の友情とは、友の悲しみ（喜び）を共に悲しみ（喜び）、その悲しみを越えさせるべく支える心であると思う。友を大切に思う心をもって、その間違いや足りない点を彼の目の前で堂々と指摘していくことができる学級の人間関係を作りたいと思った。育て合う学級である。

□ 感動する心

この子どもたちは、生きている間中背負い続けなければならぬ重荷に耐えている。その重荷から目をそらすようにする子・乗り越えようと悩む子・その重荷に気づくことさえできない子とさまざまであるが、自分の障害を正しく認識している子どもは、その苦しみから目をそらすことはしない。障害を見すえているからこそ、他の人の悲しみを自分の悲しみとして耐え、その人を支えていこうとする。また、耐え・支える人々の中に美しさを見出し、感動することが出来る。この学級も、生命の哀しさと美しさに感動する心の集まりであってほしいと思った。

一、通訳はいらぬ——木嶋さん・林さんを囲む学級——

新学期が始まって間もなく気付いたことがあった。子どもたちが、木嶋さんの意志は田嶋さんの通訳によって理解し、林さんの意志はその身ぶりで判断するということである。そこで、「もしあなたたちが『あなたは身体が不自由だから〇〇はできないでしょう、だから〇〇はしなくてもいいよ。』と言われたらどんな気持ちになるだろうか。」と問いかけた。「いやー」、「さびしい」、「仲間外れにされるようだ」と口々に言いたてる子どもたちの中で、木嶋さんも林さんも「いやー」と言いながらしきりに手や頭を横に振っていた。しばらくして、森さんが「でも、できないかどうかは、やってみなければ分らないのに。」とつぶやいた。そのことを引きとって、私は「では、木嶋さん・林さんに対するこれまでのあなたたちの思いやりは、真の友情から生じたものだったろうか。」と問いかけた。子どもたちは困惑したような表情で「思いやりのつもりだったけれど、よく考えてみればそうではなかったようだ。ことばがはっきりしないし、何度も聞き返すのは可哀想だし、また、面倒くさいから通訳や身ぶりで判断していたのだ。」と考え考え述べた。ここで子どもたちは、当事者の願いを確かめることなく「Aさんには〇〇ができない。」と決め、「できないからしてあげよう」と考えていたことの身勝手さ（あやまり）に気付いてきた。つまり、自分たちの行動を振り返り深く考えることによって、無意識を意識化することができたのである。最後に、「では、これからどうすれば良いのだろうか。」という問いかけには、「できるだけ言わせよう。言い終えるまで待とう。」、「どうしても聞きとれない時

や急ぐ時だけ、こちらからことばを提示して聞こう。「二人はできるだけはつきり言うように努力しよう。」という答えが出されるた。

特に林さんに関しては「唾液の嚥下作用と発音とは密接な関係があるから、口を閉じること、よだれを飲み込むこと、よだれ拭きのハンカチを常備しておくこと、をみんな注意してあげるように。」と指示した。注意される回数があまりに多いのでつらくないではないかと、一週間後に林さんに尋ねてみた。彼女は「これだけ言うのに長い時間かかったけれども、答えてくれた。五月中旬頃からよだれが少なくなってきた。と同時に、それまで私に頼んでいたハンカチの洗濯を自分でできると言い出し、毎日下校前に洗濯して干して帰るようになった。

木嶋さん・林さんと他の子どもたちとの会話も、以前の通訳や先取りから、「なに、もう一度言って。ん、わからん。もう一度。うん、わかった。」へと変化し始めてきた。

なお、中一での話し合いの直後、中学部会（中学部関係職員の手合）でこの方針を説明し、全員の積極的な協力を得ることができたのも大変嬉しかった。

二学期が始まってすぐに行なわれる児童生徒会副会長の補欠選挙に、木嶋さんが立候補の意志を表明した。「ものが言えないということで立候補を諦めている人もいるだろう。そういう人のためにも、そして木嶋君自身が大勢の人の前でしっかりとものが言えるようになるためにも、ぜひ推薦したい。」という田嶋さんの意見に中一の全員は賛成し、選挙運動に取り組んだ。立会演説会では「新光

園分校をもっと明るくするために立候補した中一の木嶋です。」と演説し、それを田嶋さんが通訳して、盛んな拍手を受けた。二人とも緊張と興奮とで真赤な顔をして汗をかいていたが、満足そうな表情をしていた。開票の結果、わずか三票の差で落選。「落選したのは残念だけれど、木嶋と書いてくれた人が二人もいたことを大切にしよう。」と話し合い、彼も明るく頷いていた。

三学期の始業式の日、学級会で「今年のわたしの目標」を発表し合った。その中で、林さんは「よだれをかかない（ことばが上手に言えるように）」、木嶋さんは、「一、勉強する、二、ことばを出すように努力する。」と発表し、全員の拍手を受けた。三学期にはいつてからは、「二人のことばが、時々かなりはつきり聞きとれることがありますね。」という声が教師の中から聞かれるようになった。

二、はじめてせりふを言った学習発表会における木嶋さん・林さん一

二月三日の学習発表会で、中学部では全員出場による演劇と創作音楽をすることに決まった。その練習中に、他学年の子どもや教師の中から「木嶋さんや林さんの詩やせりふを誰かがテープに吹き込んで流すようにしたらいいのではないだろうか。」という意見が出た。い、せりふをなかなか覚えられない、口、聞きとれない、ハ、間のびがする、二、緊張のあまり車いすから落ちそうで危ない、ホ、笑われたら可笑想などの理由からであった。二人は真剣な顔をして「自分で言う」と宣言。先の意見のうち、イーニについては努力する、ホは単なる同情でしかない、ということを中学部全員で確認した。特にイーにつ

いては中一で責任をもつということになり、この日から二人のために暇を見つけては特訓をする子どもたちの姿が見られた。さらに、二人がせりふを正確に言ったとしても観客は正確には聞きとれないだろうということで、せりふカードを提示することが決まった。

二月六日の学級会では、みんなが「良かった。一生けん命にやった。」という反省をした。木嶋さん、林さんは「去年はせりふがなかったけれど、今年はみんなの前でせりふを言ったことが嬉しい」と感想を発表した。それを聞いていた子どもの中から、「どんなに短くても、去年も二人にせりふを言わせれば良かったのにねえ。」という声が出た。そこで、「木嶋さん林さんはせりふを言ってみて」とは思わなかったのか。」と尋ねると、二人は「いやー」と手を振りながら、「言いたかった。みんなと同じように。」と必死の表情で言う。こんどは他の子どもたちに「こういう二人の気持ちをみんなは考えたか。」と問うと、「考えなかった。先生も言わせようとはされなかったし、自分たちもこの二人はものが言えないのだから言わなくても良いだろうという気持ちがあった。でも、今はその気持ちはない。」と答えてくれた。さらに、「みんなと同じようにせりふを言いたいと願いながら、言語障害があるからと、言うことを諦めた木嶋さん・林さんの悲しさ、つらさ、くやしさを真に理解できるのは誰か。」と問いかけると、真剣な顔をした子どもたちは、口々に「それは同じように身体が不自由で、悲しさやくやしさを持つ私たち生徒である筈だ。」ときっぱりと言った。「では、これからの生活でどういうことに気をつけていけばいいと思うか。」という問いに対しては「『できない』ということにぶつかったとき、お互いに、相手や自分を伸ばしていくためにはどうしたら良いか、

を考えていかなければならない。そして、これが、先生の好きな、『ひとりではみんなのために みんなはひとりのために』ということばでしょう。」という意味のことを答えてくれた。学級だよりには、早速つぎのような感想が寄せられた。

林、母(略) 木嶋さんが一生懸命せりふを言っているのに、私の方も、手をにぎりしめて聞きました。和美もよくがんばったとほめてやりました。(略)

木嶋、父(略) 皆本当に良くやったと思います。特に言葉の言えない子供が言う間、待ち長く、とてもやりにくかった事と思いますが、でも、これまでやれた我が子と共に、皆々様、又先生方の努力に、惜しまない拍手を送りたいと思っております。今後とも、お互いに力を合わせて頑張ってください。

高橋、父(略) 本当にびっくりする程、みんな上手に出来ました。木嶋君や林さんも、言葉の出る皆さんとちっとも変わらないう態度で感心いたしました。来年も皆さん、しっかりがんばって下さいね。(略) 敏子があんな詩を作ったのかと思うと、みんな先生のお陰です。詩を朗読する時は、私をはじめ、父母の皆さんみんな感激をされ、目頭をおさえる風景もみられました。(略)

三、みんなで手紙を書こう―校外学習と豊かな心の表現―

新宮工場見学(九月二六日、徒歩、タクシー)

学校の近くにある工場を見学した。最初の「ナショナル・マリソン・プラスチック工場」では、むんむんする熱気と激しい機械音の中で、小さな粒から真白い発泡スチロールの型ができてくるのを、

驚きの声をあげながら見学した。緩衝材・断熱材として幅広く利用されているという説明にもいちいち頷いていた。二番目に見学したのは「ニシキゴム工場。紙オムツの工場では殆んどが機械化されているのに驚き、オムツカバーの工場では、裁断・縫製を目にも止まらぬ速さでしてしまふ女子工員さんたちのみごとな手さばきに感心した。大部分の製品が輸出されるという説明を聞いて、「この国への輸出が一番多いのですか。」などの質問もした子どもたち。案内・説明・もてなしと、工場の方々から親切にして戴いたのに、「ありがとうございます。」「さようなら。」のことばが出なかつた。

次の日の反省会で、「身体は不自由でも心は不自由ではないはずなのに、親切に対して心から『ありがとうございます』と感じることができないということとは、心まで不自由になってしまっているということだろうか。」と情ない気持ちを子どもたちに伝えた。子どもたちは、はっとしたような顔をし、「お礼を言わなければ……」と小さな声で言っている。「どんな方法で」という問いを受けて、「もう一度行ったら……」とか「電話をかけたら……」とかいろいろ考えた挙句、「先生、手紙を書いたらどうでしょう。」という清水さんの意見に、みんなは救われたような表情になつた。

早速書き始めたが、「いろいろありますがどうございました。」(高橋、清水)、「勉強になりました。」(森)という書き方が多い。

「何が、なぜ、ありがたかつたのか。どういうところが、どういふふうに勉強になつたのか。どういふところに驚いたり感心したりしたのか。そういうことをよく考えて書くように。」と指示して、何度も何度も書き直させて、礼状はできあがつた。

指摘されて初めて、自分の喜びや感謝の気持ちに気付いた子どもたち。しかし、工場見学そのものが彼らの切実な願いではなかつたために、礼状への取り組みもその内容もかなり形式的であつた。見学参加者五名のうち礼状を書き上げたのは、高橋、清水、森の三名であつた。

この反省を生かして、以後の校外学習では「経験領域の拡大」と並べて、特に「自主性の育成」を重点的に考えることにした。従つて生徒とも相談した結果、校外学習に関する一切の仕事を中学部集会委員会(教師一、生徒各学級より二)に任せることにした。

貝塚公園(一〇月一九日、郊外電車)

前日になつてやつと西鉄から「車いすで乗車することを許可します。」と言つてきた。一九日は快晴。はじめて自分で切符を買つた子どもたち。握りしめていた五〇円硬貨が汗でぬれていた。秋晴れの日を、貝塚公園の広々とした芝生で過ごした。

反省会の中で、「よかつた」、「楽しかつた」、「電車に乗つたのも切符を買つたのも初めてだつたよ。」と騒がしいほどの感想を述べ合つたあと、「先生、西鉄のおじさんたちにお礼の手紙を書くと思うんですけど……。」と森さんが言い出した。子どもたちの中からごく自然にこのことばが出てきたことは嬉しかつた。すぐに、中一全員が書くことが決まつた。

そこで、「礼状を受け取る立場に立つてごらん下さい。中一の五名だけからの礼状を受け取つて、西鉄のおじさんたちは喜んで下さるかしら。」と、立場を変えて考えてみることを示唆した。「そうねえ」と考えていた子どもたちは、「中二、中三の人たちにも書くうよつて働きかけてみます。」と帰つて行つた。

ところが次の日、教室へ行ってみると子どもたちは冴えぬ顔をしている。他の学年から「車いすの人が車いすごと電車に乗るのは当然のこと。当然のことだから礼状を書く必要はない。」という反論が出て、答えられなかったのだという。直ちに学級会を開く。話題は「当然であることと、感謝の気持ちについて」である。いつものように次から次へと出す私の質問について考えていくうちに、「車いすは私たちにとっては『足』なのだから、車いすごと電車に乗れるのは当然だと思う。だから、礼状は書かなければならないというわけではない。しかし、西鉄の現在の内規をそのまま適用すれば乗れないところに特例を認めるよう努力したり、当日介助をしたりして下さった西鉄のおじさんたちに、『ありがとうございました』という気持ちをは伝えたい。だから私たちは手紙を書くのだ。」「礼状を書かねばならないから書くのではない。嬉しい気持ちを伝えたいから書くのだ。これは、人間としてふつうの気持ちだろうし、大切にしたいものだ。」という結論を導き出すことができた。そのあと、再度他学年に働きかけたところ、中学部全員で礼状を書くとういうことになった。

田処さんは「にー、しー、てー、ちゅー……」と声に出しながら「にしてつのみなさんありがとうございました」と一時間で書いた。木嶋さんは、「にしてつのみなさん ありがとう」と言い、私が板書したその文字を見ながら、二日かかって書き上げた。林さんも一生けん命に書いた。林さんは正しい発音ができない。少ない音韻で話すから、どうしても正しい話しことばにならない。そして自分の発音した音の通りに文字を書くので、でき上がったことばは正しい書きことばになっていない。これまでも何回か手紙を書いて

いるが、その時はいつも身ぶりをまじえた話を誰かに聞いて貰って正しく発音し直して貰い、その発音通りに文字を書くという方法をとっていた。つまり、発音と文字とはつながるが、観念と文字とは結びつきにくいのである。これまで、周囲のあまりにもやさしすぎる人々によって奪われていた林さんの「ことば」を、いま、ここで、返してあげたいと思った。だから私は「にしいえつ（にしてつのみなさん（みなさん）うるまじる（くるまいます）えんたかずた（でんしゃでかいずかへ）いまいた（いまました）あいいとつ（ありがとう）」と二週間かかって書かれた手紙を見て、わざと「和美ちゃん、にしいえつってなあに、うるまじるってなあに」と尋ねた。林さんは考える。そして、「うーうーあーいーうー」と一音一音を確かめながら、何度も書いては消し書いては消しして、一カ月かかって書き上げた。自分だけの力で書き上げた最初の手紙。林さんは目を細め机を叩いて「うれしい」と言い、国語の時間をさらに一カ月近くつかって、今度はひとりて書いた喜びを伝える手紙をお母さんに書き送った。高橋さんは手術のために参加できなかったけれども、みんなの喜びを自分の喜びとして受けとめ、礼状を書いた。森さん、清水さんの礼状には、車いす乗車が許されないかも知れないという不安が深かっただけに、一般の人々と同じ電車に乗れた喜びが溢れていた。「障害者である私たちを一般の人々に理解してもらいたい。そのためには、こういう経験を重ねることが必要だ。」という声もあげ始めた。

デパート（二月二六日、乗合バス）

「貸切バスでなく、ふつうの人と一緒にバスに乗ってみたい。お年玉で、記念になる本を自分で買ってみたい。」というわけで

西鉄の乗合バスを利用して香椎のデパート「アピロス」へ行った。生まれて初めて乗合バスに乗った子どもたち。整理券もとった。両替もした。こうして香椎の町を歩き、「アピロス」で楽しい買い物をした翌日の朝、「おはよう」と教室にはいった私に、子どもたちは口々に言った。「先生、みんなで話し合ってお礼状を書き始めているんですよ。でき上ったら見て下さい。」、「お互いに注意合っていて一日も早く仕上げようと言っているんですよ。」「役場へも、車いすを運んで載いたお礼を書くことにしました。」三度目の正直。今度は中学部全員が書き始めているという。校外学習のたびにこなっていた反省会も自分たちですませており、私との話し合いはその復習となった。

「見て下さい」と持ってきた手紙をさらに推敲させて、三月の頃にやっと完成した。田処さんは「ありがとうございました ありがとうございました」ともたのしかったです。かいものをしたのわはじめてであがりました。とてもべんきょうになりました」と書いた。木嶋さんは五十音図を横に置いて、ほとんど自分の力だけでつぎのような手紙を書き上げた。

「あびるす(の)みなさん べば(あ)とはは(じ)めていきました びっくりりました おせわになりました たくばく(啄木詩集——浜本注) おかいました」林さんは、「うれしかった」ということばの表記に苦労した(うれしなに↓うれしなた↓うれしなに↓うれしかた↓うれしかった)が、とうとう誰からも教えて貰わずに、「アピロスのみなさん お先(元) 気ですか。わたしも先(元) 気です。かいもの うれしかったです。日本の名作童話をかいました。にんぎょうをもらいました。みんな、いきました。アピロスのみなさ

ん ありがとうございました。さようなら」という手紙を仕上げた。森さん、高橋さんは、喜びと感謝を綴った。清水さんの手紙は「アピロスの皆さん この間は どうも有がとうございました。私達が、一階、二階、三階を車いすで駆け回れたのはスロープや道幅が広がったからではないでしょうか。それに、好きな本を自由に選べたのもやはり道幅が広がったからではないでしょうか。(略) 私は生まれた時から下半身マヒであまり外に出る事は少なかったのですが勇気をだして小学生の頃から母と一緒にデパートなんかに行きました。でも私をジロジロ見ていくのもとてもくやしかったです。ただ足が悪いだけで見つめるなんてひどい事だと思えます。一人の手では「私達障害者が自由になくらしが出来るような社会に」などと言っても無理です。やっぱり皆でデパートなどへ行ったりしてがんばれば私達のくらしも良くなるのではないのでしょうか。私達は精一杯頑張ります。(略)」と、内容がかなり具体的になっていた。

校外学習のたびに礼状を書かせられる！という不平が育ち始めるのではないかと心配していたが、子どもたちは楽しかったことを反芻しながら楽しげに手紙を書いている。そこには、「書かせられる」という意識は感じられない。周囲の人々の親切や好意をそのまま感じ受けとめる心の柔らかさと、喜びを伝えようとする素直さが定着しはじめているように思う。その心の広がりが大きくなるのと並行して、手紙の内容も充実してきたし、障害者問題への関心も深まってきている。

○ おわりに

① 内に眠らせたままにしている人間としての欲求を、ことば化する事によって意識させ、行動によって経験させることから、自主性・自律性は育っていく。

② 欲求を欲求として意識するためには、ことばを獲得しなければならぬ。話し合いをし、礼状を書くことの中で、子どもたちは自分の意識や感情をことばによって表わすことの難しさに直面した。

そして、そのことばを使わなければ、自分たちの欲求も感情も意志も十分には伝えることができないということも学んできた。お互いに厳しく要求を出し合い批判し合い、立場を変えて考えていく中で、集団を高め、個人を高めていった子どもたちは、集団の中で生きることの難しさと素晴らしさを感じ始めている。

③ また、感情は、ことばで表わすことによって、さらに豊かになっていく。

(福岡県立福岡養護学校、新光園分校)

注

(1) 新光園分校は、肢体不自由児養護施設の新光園立粕屋新光園に併設された学校である。手術や訓練のために入園してきた子どもたちは、直ちに新光園分校の小・中学部に編入され、短い子で三カ月、長い子は数年間をここで過ごす。

治療が終了すると退園になるわけだが、重度の子どもたちは地元の小・中学校から受け入れを拒否されることも多い。分校に入学して、友だちと一緒に「学ぶこと」・「遊ぶこと」の喜

びを知った子どもが、退園後再び無感動・無表情になっていく例もある。

(2) 生徒の作詞・作曲によるうたを発表した。木嶋さんの詩には清水さんが、高橋さんの詩には中三の高向さんが、それぞれ曲をつけた。

くるまいます
木嶋 誠二

くるまいます

ひとりでこいで 行きたい

だれの手も借りないで

思うまま

こころもかるく こころもかるく

くるまいます

ひとりでこいで 行きたい

ゆめを さがしに
高橋 敏子

はやく足がよくなつて

あかるい町へ

しらないところへ

ゆめを さがしに 行きたい

びっくりするほど

走って行きたい。